

2019年度 心の輪を広げる体験作文(内閣府主催)



長谷川さんは、広汎性発達障害がある8歳年下の弟さんが通う施設を訪問した体験を作文にしました。今回の受賞にあたり、長谷川さんに作文に対する思いなどをお聞きしました。

▶昨年12月24日、父親の良さんと市役所を訪れ、三河市長に受賞を報告しました。

母が「クール」を探してくれた
—作文の応募のきっかけを教えてください—

普段から文章を書くことが好きで、日々の生活で印象に残ったことがあると書き残すようにしています。今回の作文は、私が夏休みを利用してボランティアに行った、弟の通う施設での体験を書いたものです。この作文を母に見せたところ、「良い作文だから何かに応募してみない」と言われ、高校生が応募できる「クール」を探してくれました。元々クールへの応募を意識して書いたものではないので、私が感じたままの言葉で書いています。

弟と本当の意味での家族になれた
—ボランティア参加の前後で、どのような変化がありましたか—

私はこれまで弟のことを障がい者としては強く意識しておらず、「可愛い」弟として見ていました。ところがボランティアに行った時、弟が施設で他人に迷惑をかけている姿に恥じらひを感じ、弟をわずらわしい存在として見ている自分があることに気づきました。同時に、年齢を重ねて「可愛さがなく

なった」弟との暮らしを考えていなかったことにも気づきました。これから先、大人になっていく弟と、弟の障がいを受入れ、支える覚悟を持たないといけないと実感したんです。もしボランティアに行っていなければ、いずれ弟を遠ざけるようになっていたと思います。今では、家族で支え合って弟と一緒に暮らす未来像が明確に描けます。弟と本当の意味での家族になれたと思えました。

みなさんが弟を受け入れてくれたら
—弟さんの普段の生活から感じていることは何ですか—

国東市は障がい者にとって本当に住みやすい所だと思っています。弟は伊美小学校に通っています。入学前に母が当時の校長先生に「息子は幼稚園でも大変ご迷惑をおかけしたので、小学校ではなく支援学校に入学した方がよいでしょうか」と相談したところ、校長先生が「みんながお子さんの入学を楽しみにしていますよ」とおっしゃってくれて、母はその言葉が本当に嬉しかったと言っています。実際、みなさんが弟のことを理

解してくれていて、弟は学校で生き生きと生活しています。弟のお友達は、誰にでも優しくできる人に成長してくれると思います。この環境なら、将来弟も何かの仕事に就いて、家族と楽しく暮らしていけると感じています。

いつか自分がなくならない
—長谷川さんの将来の夢は何ですか—

アニメや漫画のクリエイターなど、人々に感動を届ける創造的な仕事に興味があります。障がい者と関わることも興味があるので支援員さんの資格を取りたいとも思っています。また、見聞を広めるために進学も考えています。したいことがたくさんあり、悩んでいます。今後に活かせるよう、色々な芸術作品に触れて感受性を磨きたいです。



障がい者の家族として

大分県立国東高等学校双国校2年 長谷川 歩

世間から見た障がい者のイメージは、どのようなものだろうか。私が聞いたものは「怖い」「迷惑」「可哀想」「ガイジ」などだ。そのことをネットで、障がい者の家族の前で、そして本人の前で言う人がいる。私はそれが嫌で、許せなくて、理解もできなかったのだが、この夏の経験を通して、自分の考えがいかに薄っぺらく、偽善的であったかを思い知った。

私には広汎性発達障害の弟がいる(以下H)。私が小学二年生のときに生まれた子で、「H君、成長遅くない?」と友人に言われたときも、私はHをずっと「普通の子」と思っていた。なので母から、私を含めた姉妹に弟の障がいのことを伝えられたとき、心底驚いたし、また「普通」じゃなかったことにショックを受けた。

けれど当時小学生だった私は、「弟君のお世話、偉いねえ」という周りの評価に誇りを感じていた。その枕詞に「障がい者の」がつくことが明らかだったからだ。周りの大人が私とHの関係をもてはやし、いつの

まにか私も「障がい者の」Hがいることを美談にしていた。Hの幼い愛らしさ、そして周りの大人のその評価があったから、私は今までHを世話していたのだ。私は、今回の経験でそれがいかに考えなしであったかを痛感できた。今年の夏休みの数日間、障がいを持った子どものお世話をする施設にボランティアに行った。以前からHも通っていた施設だったので、どのようなものか興味があったし、なによりHの過ごし方が気になっていた。

私は困惑した。Hの態度が家にいるとき以上に荒かったからだ。迷惑をかけることは最初からわかっていて、現場にいると耐えられないものがあった。「他人」に害を加える弟を「可愛くない」「恥ずかしい」と思う自分がいたのだ。そのHの気を必死に逸らそうとして、いる支援員さんや間近で見ている、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

子ども達を家に送るとき、Hがまた癩癩を起こした。車の中で暴れて泣き叫び、他人に迷惑をかける弟に私は不甲斐なさを感じて、「本当に

ごめんなさい」とHを抑えながら、運転をしていた支援員さんに言った。「いいんですよ」と普段と変わらない声でおっしゃったので、気を遣ってくれているのだろうと思い、私は一層惨めに感じた。そのとき彼女は付け加えた。「まだ『大きい赤ちゃん』って言えるもんね」

彼女はベテランの支援員さんだった。沢山の障がい者をみてきて、沢山の障がい者を導いている人が、そう言った。私のそのときの衝撃なんてお構いなしに、Hは叫び続け、私にしがみ付いていた。

挨拶をして家に帰り着いた途端、涙がとめどなく溢れた。それはHの将来を考えたからだ。彼も年をとって、私達と同じように中年になり、高齢者になる。「可愛いH君」じゃなくなる。世間が彼を許容しなくなる。

Hが成長した時、まだ「可愛いH君」として扱ってくれる人がどれだけいるだろう。急に大きい声をだして、意味が分からない行動をとる他人を、一体どれだけの人が尊重し、その家族を「偉いねえ」ともてはやしてくれるだろう。

その問いに対する一部の答えが「迷惑」「可哀想」「ガイジ」なのだ。障がい者が家族でも身内でもない人にとって、自分の理解の範疇を超え人間は異物なのである。

では障がい者は本当に怖くて、可哀想で、生きていく意味がないのか? 今回のボランティアの体験で、それだけは前よりも確固たる意志を持って否定できた。楽しいこと、嬉しいこと、苦しいこと。それぞれ表情豊かに今を鮮烈に生きて、命を輝かせているその姿は、私達と何も変わらない。人生を謳歌している一人の人間だった。その命に間違いも貴賤もないと、心の底から思った。

この経験によって、障がい者を蔑ろにする人にモラルが欠如しているとは思わなくなった。H達の現実を正確に想像し、慮ることは家族でさえ難しいのだと、身を以て痛感したからである。私は障がい者の家族になりきれないなかつた。彼らと過ごさなかつたら、私は一生馬鹿なままで、将来Hを煙たがる「他人」になつていただろう。「可愛さ」から離れていく弟を支え、彼の障がいに対する「障害」を受け止める。その覚悟があつて、私はやっとHの家族になるのだと思う。

彼らを認め、理解するのは難しいと思う。それでも私は彼らを正しく知ってほしい。それは私がそうだったように、自分の考えと直面して、人間として成長できる機会を、彼らから受け取ることができるからである。